

# 伝能因所持本枕冊子の昭和写本について

The Showa Manuscripts of The Pillow Book thought to have been possessed by the Priest Noin

中西 健 治

はじめに

枕冊子諸本のうち前田家本を除く三系統本の中では伝能因所持本系統本（以下、能因本と略称）がきわだたって伝本が少ない。現在では三巻本系統本による枕冊子読解が主流とはいいながらも、なお能因本の本文にも一考すべき点があるろうことを述べる機会があった。<sup>1)</sup> その検討の過程で、能因本の伝本についても調査したが、与えられた紙幅では割愛せざるを得なかったので、本論集を借りてその一部を報告しておきたい。

能因本諸本のうち写本の完本としてもっとも優れた本文をもつと言われているのが三条西家旧蔵現学習院大学蔵本であり、ついで富岡家旧蔵現相愛大学相愛女子短期大学図書館蔵本がある。このうち前者はやく田中重太郎氏の『校本枕冊子』（以下、『校本』と略称）の底本となり、また近年、松尾 聰・永井和子両氏校注・訳の日本古典文学全集『枕草子』（以下、『全集』と略称）の底本としても、また、根来 司氏の『新校本枕草子』の対校本としても活用さ

れて流布している。さらには笠間書院から笠間影印叢刊として影印出版され、原本のさながらなる姿を見ることができようになった。一方、後者の本はつい先だって柿谷雄三、山本和明両氏によって本文の影印と翻刻とが一書にまとめられた。<sup>(2)</sup>このことで、能因本の写本完本の二本本文は共にほぼ完全なる姿が一般に開示されることになった。しかしながら、前者は自ずからなる本自体の疲弊などから、後者は火災による類焼という人的災害によって、両本共に容易に完全なる姿に接することは困難な状況ではある。火災による本文消失は如何ともしがたいものの、前者は本そのものの損傷がはげしいことに解説の隘路があり、そのことについては松尾 聰氏が笠間影印叢刊の末尾に付されている「解説」において詳細をきわめた注記を施されて原本の面影を復元出来るような配慮をされているのである。つまり、虫損などが本文の正確な把握に支障をきたす恐れなしとしないことを慮っての処置として、昭和八年に鈴木知太郎氏が当時の所蔵者であった三条西伯爵家から拝借して影写された陽画感光紙による復写本を参照したうえで本文復元作業をされた結果を詳細な注記として列挙し解説されたのであった。これによってわれわれは居ながらにして能因本の最善本たる学習院大学蔵三条西家旧蔵本（以下、学習院大学本と称する）の姿をみることができ、また、『校本』の成果に本書を加えることによって安心して本文のありようを確認することができるのである。

(一) 『校本』に用いられた能因本

ところで、稿者の勤務校（相愛大学）の図書館（相愛大学相愛女子短期大学図書館）の特殊文庫の一つである春曙文庫にこの学習院大学本を忠実に筆写したとする奥書をもつ二巻二冊の写本（春・二九七）がある。いま『春曙文庫目録（和装本編）』に記されているところを左に示す。

枕草子

二冊

写本

九一四・三S・春二九七

清少納言著 二六・七×一九・九種 一一行 一〇〇丁・一一七丁 奥書「この枕草子二巻は三條西家秘蔵本にして豎／八寸八分横六寸五分墨付上巻百枚下巻百拾五／枚楮紙袋綴なり表昏は青色の紙製なれとも／虫害の爲寸断せられ僅かに其の形骸を止むるのみ／今これを借り受け謄写するに当り虫害の爲読／み難きケ所多く誤写誤字等免れざるへし／後の見む人校正を給はらは幸甚／昭和十年十一月馳老筆謄写之畢 宏文(花押)」

\*書名は外題による 伝能因所持本系統本 三條西家旧蔵本の写し 田中博士の「昭和」一六、一一、二六午後二時 池田亀鑑氏本ニヨリ照合了」の小書あり

奥書末尾の「宏文」とは、当時、枕冊子諸本の本文研究に精力的に取り組んでおられた池田亀鑑氏の御父君、池田宏文氏のことであろうと思われる、これによって鈴木知太郎氏に遅れること二年、これまた三條西家の秘蔵本が筆写されていたことがわかるのである。奥書には虫損による誤字誤写などを心配する旨が記されているが、影印本と照合するかぎり、実に驚くべき正確さで筆写されていて、字形、字配りなどもほとんど等しいのである。そしてこの写本には、上冊の最終丁(ウ)の左隅下に「16・11・19 照合了」とあり、下冊の最終丁(ウ)の左隅下に「16・11・26 午後二時 池田亀鑑氏本ニヨリ照合了」と、それぞれ鉛筆で薄く記入してある。この記事こそ、『校本』の著者、田中重太郎氏が校本作成作業の能因本本文として活用するべく、池田亀鑑氏御所蔵の写本を忠実に書写した本であったと推測されるものである。<sup>3)</sup>

『校本』(上巻)の「自序」には次のようにある。

思へば、この校本の校合をはじめて原稿用紙に写したのは、昭和十五年九月一日であった。そしてひととほり原

稿が出来たのが、昭和十八年の春であつた。その時、わたくしは氣負つた長い自序を書いてゐるが、いまそれここに発表する勇氣はない。爾來改稿三度、校異採択の本を加へ、やつと陽のあたる場所へ出すことができたのは、やはり人のおかげである。

田中氏が校本作成の初期には春曙抄をもとに校合しておられ、その祖本である学習院大学本を求めて作業をすすめる過程で「池田龜鑑氏蔵本」を借り受け、本文校合作業をされていた時期と鉛筆で記されたそれとは当然のことながら重なる。田中氏は後年、次のようにも述べておられる。

わたくしが『校本枕冊子』の主底本に能因本の三条西家旧蔵本を選んだのは、『春曙抄』本文に対する不信といふか、校訂にあき足りぬ氣持ちというか、そんなものが強くあつて、より純粹な能因本を底本とするようになつてしまつたのである。校本の底本に流布本を選ぶことが常識であつた。つまり、江戸時代から讀まれて来て、世にもっとも流布している『春曙抄』本文で全語索引をと安易に考へていたのが、『春曙抄』本文、しかも岩波文庫本のその本文があまりにも安心できない校訂であつたので、そのよりよき本文を考え、選んでみた。当時は『春曙抄』本文を底本にしたテキストや注釈が、一般的であつたので一般性の上から長い問世に流布している本文を底本にすべきであるという校本常識論から『春曙抄』本文を底本にしたのであるから、その祖本であるよりよき能因本を中心にしてしまつたのである。<sup>(4)</sup>

これは『校本』底本選定に至るまでの経緯を明らかにされているところであり、その具体的な作業に用いられたであろうことを裏付ける意味でもこの写本は重要な位置をしめる本と言えよう。田中氏が「池田龜鑑氏本ニヨリ照合」し

たと記された、当の「池田亀鑑氏本」も学習院大学本を写した本であるはずである。それは、いま東海大学付属図書館の桃園文庫に所蔵されている。<sup>(5)</sup>『桃園文庫目録(中)』によれば、春曙文庫本とまったく同じ書写奥書があることから、かれこれ対照させてみたいと思ひ、東海大学付属図書館に閲覧の許可をもとめたところ、快く御協力をいただくことができ、本稿をまとめることができた。

総じて、二本は装丁上の若干の相違を除けば、本文の異同はほとんどなく、<sup>(6)</sup>実に慎重な書写がなされているといひ、いわば至極あたりまえのことが確認できたことであつた。もっとも、ただこれのみを報告するのは如何かと思われるので、副産物として気付いたことの一部を記しておきたい。

## (二) 昭和写本検討の意義

まずはじめに、学習院大学本を書き写した、いわば昭和写本ともいふべきものの二本を検討対象とすることに、本文研究上いかなる有効性があるのか、という点についてのおかねばならないだろう。その筆頭にあげべきこととして、なによりも、伝本の少ない能因本系統の写本本文の現況を認知し得ることがあげられよう。そしてその事実によつて、たとえ近代の写本といへども、実際の書写のありようがいかなるものであつたのかを観察することがある程度可能になり、また、現在、一般に利用されている影印本における疑問箇所が判明するところや誤りなども指摘できそうなことも検討事由の一つである。これらのことなどについて、以下、あらあらと調査した割記をもとに報告しておこう。

池田宏文氏が書写をされた学習院大学本はなにぶんにも損傷がはげしく、鈴木知太郎氏や池田宏文氏自身も、おそらくは書写される際にはかなり難儀されたことと想像され、また直接この本をもとに研究された松尾 聰氏や田中重

太郎氏なども慎重な扱いを余儀なくせられたことであつたらう。『校本』や『全集』末尾の「校異」・「校訂付記」などの注記にそのことが読み取れるのである。本そのものに物理的に判読しがたい箇所を随所に抱える写本であつてみれば、本文を書写するという営みにいささかの瑕瑾はいかにも免れ難いものであらうし、そのところから、むしろ生きた人間の姿を垣間見することも許される範囲内のことではあらう。いま、そのような視点から、学習院大学本本文に付された本文以外の注記のうち、見せ消ちと補入がどのように書写されているかという点にのみ絞つて考察してみよう。

### (三) 昭和写本二本の本文

さきにも記したように笠間書院刊の影印本には巻末に松尾 聰氏の執筆された解説と、影印本においてもなお判然としかねる箇所についての注記が付されている。とりわけ注記は、上巻四二〇箇所、下巻五六〇箇所をあげてその一々について字母や注記の真相、原本の紙の傷みや汚れなどの存在を克明に記されていて、一般読者に対して原本のさながらなる姿を提供しようとする良心、あるいは学究者の執念とも言うべき熱情が滲み出ているように思われるものである。<sup>7)</sup> さらに影印本刊行の三年後の昭和四十九年四月、学習院大学本を底本としてその「あるがままの本文を、徹底的に尊重する立場を保持することを原則」とした『全集』が刊行され、巻末に付された「校訂付記」にも同様の姿勢が貫かれ、両々相俟つて後進の学ぶべきものの大きいことを痛感させられたのである。

この「校訂付記」の中で見せ消ち、補入について言及されている百一箇所(上・四十五、下・五十六)について、春曙文庫本、桃園文庫本がどのように書写しているかを検証してみると、原本たる学習院大学蔵本と齟齬を来しているいくつかの箇所を見いだすことができ、それらはおおよそ次の三つの類型に分類することができるように思われる。

たとえばこういう箇所。(影印本の巻と頁数行数を記し、影印本注記を引用する)

(上・5…1— のあ(乃安)りさかり(写真デハ見エナイガ「かり」ニハ右側ニ「ヒ」形ノ見セ消チノ印ガアル)

いかにも影印本に「ヒ」形の見せ消ちはない。『校本』においては「馬のあかりさはきたるも」(三・18<sup>8</sup>)と翻刻されていて、校異欄に「さはき——三さ「かり」はき」とあり、『全集』では「馬のあがりさわぎたるも」(六五頁)として巻末の「校訂付記」に底本は「馬のありさかり(「かり」見セ消チ)はきたる」とあることを示されている。この箇所を春曙文庫本、桃園文庫本共に見せ消ちを無視した本文を書いている。また、このすぐあとのところ、

(上・6…四 う<sup>た</sup>れし〔補入ヲアラワス〇ガ写真デハ見エナイ〕)

『校本』では「うたれしよ——三う〇れしと」(三・22)と校異を示し、『全集』も「校訂付記」に「打たれじ(諸——う(次ニ「た」補入)れし」と記すところであるが、春曙文庫本・桃園文庫本共に「うれし」としか記していない。このような、原本にある見せ消ちや補入を無視して書写している例をAとする。

また次のような例もある。

(上・12…四 うちとけつるも〔も〕ノ右ニアル片仮名ノ「ヒ」ノヨウナ形ノモノハ見セ消チノ印デアル)

『校本』では「うちとけつると——三うちとけつる「も」と」（六・八）とあり、『全集』も「も」の見せ消ちなるところを「校訂付記」に示されている。ところが春曙文庫本、桃園文庫本共にこの「も」に該当する箇所を空白にしているのである。つまり、原本における見せ消ちを書写の際に本文として扱わないという理解のもとに省略し、なおかつその箇所を空白にして次の文字を繰り上げて書写することを避けているのである。こういう例をBとする。

あるいは、次のような例もある。

（上・137…十 つくらせ給へりなといへは「なと」二八左側二見せ消チノ印ガツケテアルガ、「いへは」ハ中央二縦

線ヲ引イテ末梢シテイル）

『校本』、『全集』本文共に見せ消ちの指示に従い、そのうえで傍記の「中宮」を採用しているのであるが、春曙文庫本、桃園文庫本共に「し中宮」を本文として原本にある形跡を留めていない。つまり、見せ消ちや傍記を本文とし取り込むことによって原本本文を改めてしまっているものもある。こういう場合をCとする。

もちろん原本を忠実に写すことが絶対条件であるから、見せ消ちや傍記をもそのままに写している例がもっとも多いことは確かではあり、A～Cに属しない箇所は七十八箇所を数える。

そこで春曙文庫本、桃園文庫本について以上のABCの三類型がどのようになっているかをまとめると次のとおりである。なお、掲出の頁数は参照の便を図って笠間書院の影印本の頁を示し、併せて下段に『校本』の章段と頁、『全集』の頁とを参考に掲げた。文字の右傍の傍点が見せ消ちのあることを示す。

〔Aの例〕

(上冊)

5 | 11

のありき、かりはきたる<sup>(9)</sup>

三 .. 18  
/ 65

6 | 4

うかゝふう〇れしと  
た

三 .. 22  
/ 65

36 | 6

とひきゝなとせしにかし

二十一 .. 15  
/ 92

39 | 1

こほうもなぐつかねは

二十二 .. 25  
/ 95

131 | 8

思ふは、かり給へしと

九十 .. 6  
/ 184

(下冊)

18 | 7

いひきかすへかりめるを

百二十八 .. 12  
/ 260

37 | 5

みのむしのやうになる

百四十一 .. 3  
/ 278

〔Bの例〕

(上冊)

12 | 4

うちとけつるもとわらはせ

六 .. 8  
/ 70

76 | 6

みちやうたてたれはる

四十六 .. 6  
/ 129

78 | 1

夕くれのほとにときす

四十六 .. 22  
/ 131

131 | 6

わたくしにはいひかてか

九十 .. 5  
/ 184

195	147	137		39	19	197	192	187	165	155	140
9	3	10		9	3	11	6	1	7	8	6
まゆぬくおりのかみ	いろあひこく花ふさなかく	つくらせ給へりなといへは		いきたりけるをこひやうかま	人などをかたらへて	しろにてややはらくひければ	女房ともにのいひかはす	あまたこくにうすくて	いぬへきかりける	うす氷あはにあはむすへる	山吹すけなと
			中宮		おにわらはゝたて						
百十二	九十二	九十一		百四十一	百二十八	百十三	百八	百八	百	九十四	九十一
..	..	..		..	..	..	..	..	..	..	..
2	1	55		29	18	22	81	27	36	26	82
243	198	190		281	260	245	240	235	216	206	192

## おわりに

これ以外にも、例えばAのまったく逆で、書写に際して補入の印を明確に記している「御りやうの馬おさ」(上冊・114—5・八十三—2/167)のような箇所もあり、子細に点検すればさらに指摘することもできよう。

とりあえずは以上のように幾つかの齟齬を拾い出すことができたのではあるが、枕冊子の本文分量全体からみればこれらの齟齬はきわめて微少な数と言わざるを得ず、むしろ書写にあたっての真摯な態度をこそ浮かび上がらせることになったのではなからうか。Aに分類された七例は見せ消ちや傍記を見逃しているのであるから、確かに書写者の写し誤りとみられるのであろうし、Cにしても、踏み込みやすい領域に思わず立ち至った痕跡を留めるもので、いずれもしばしば見受けられる事例ではあるものの、本文読解にほとんど支障を来さないものである。それだけに緊張した書写作業のなかに垣間見えたいささかの人間臭い息遣いを感じさせるものではある。それに対して、見せ消ちの箇所を含めてそのまま写せばすむようなところをあえて空白にしておく処置をとったBの箇所がやや多いのは、謹厳な書写の姿勢に加えて書写者の本文批判の判断を反映しているものと解せるものであろう。いずれにしても、枕冊子本文そのものに踏み込んだのはCの三例のみであることから、結論的にいえばほぼ完璧に原本本文の姿を伝えている写本であると判断できよう。実に平凡極まりない、しかし千鈞の重さを感じさせる結論を得た次第ではあった。

## 注

(1) 拙稿「伝能因所持本」(雨海博洋氏他編『枕草子事典』所収)

(2) 『富岡家旧蔵 能因本枕草子』

(3) 春曙文庫本と桃園文庫本との大きな相違は本の疲弊具合にあるといってもよい。春曙文庫本に多く見られる鉛筆による書き込みや下冊の周囲に焼け焦げた痕跡のあることから、本書が『校本』作成作業に用いられたものと推測される。

(4) 田中重太郎氏『枕草子』伝本研究の現段階〔月刊 文法〕昭和四十六年二月号〕

(5) ちなみに春曙文庫本と桃園文庫本の装丁上の相違点について若干触れておこう。

桃園文庫本は鮮やかな緑色の帙に収められており、薄様紙の袋綴の各丁に間紙が入れているため厚さは上冊が約二種、下冊が約二・四種で春曙文庫本に比べやや部厚く、紙も疲れてなくて、書き込み等も一切ない。それに対して春曙文庫本は紺色の帙に収められているが、かなり傷んでおり、とりわけ下冊は周囲が少し焼けている。厚みは上冊が約一・三種、下冊が一・六種である。貼題簽も桃園文庫本は「枕草子 三条西本 上(下)」とあるのに対して、春曙文庫本は「枕草子 上(下)」とのみの墨書である。綴糸は前者が四穴に対して後者は五穴である。また、春曙文庫本には下冊に錯簡が一箇所(五三丁と五二丁)見いだされる。なお、『桃園文庫目録(中)』は該書について次のように記している。(省略部分は春曙文庫本に同じい)

枕草子 現写 二卷二冊 桃 一八五

清少納言著 池田宏文写 袋綴 紙表紙 二七・二〇〇種 十一行 題簽左肩「枕草子三条西本」

奥書「枕草子は人ごとに持たれとも誠によき本は世にありかたき物也(以下省略〓中西二ヨル)」

宏文云「この枕草子二巻は三條西家秘蔵本にして(以下省略〓中西二ヨル)」

(6) 春曙文庫本と桃園文庫本は本文についてはほとんど異同はない。例えば下冊「かたらへて」(19―3)の箇所には見せ消ち、傍記を示したうえで、上部に小さな紙片に該当箇所のみを転記している異例な処置の施されているところであるが、これも全く同様である。ただ一箇所、春曙文庫本が本文を写し落としている(下冊・137―8「女房ともをよひつかひつほねに物いひ」〓二百四十二・4/377)のが際立った異同と言える。

(7) 笠間書院の影印本は、松尾氏の解説を併せ読むことによって原本の面影をほとんど完全な状態で復元することができるのであるが、次の二箇所については見せ消ちのあることが『校本』や『全集』の「校訂付記」で確認でき、春曙文庫本、桃園文庫本もそれぞれ見せ消ちを書き写しているにもかかわらず、影印本では本文のみである。

(上冊) 166―2 人のいたくゑいたるそれさかしかりて 百一・2/216

191—11 などの給ふはするを

百八・76 / 239

(8) 『校本』における章段数と行数とを示す。以下同じ。

(9) 桃園文庫本は「のありさかり」とし、春曙文庫本は「のあかりさかり」としている。『校本』『全集』共に「かり」の二字を見せ消ちにしているように注記するが、春曙文庫本は鉛筆で「さか」の右に見せ消ちの印を付している。

付記…調査にご協力いただきました東海大学付属図書館御当局並びに相愛大学相愛女子短期大学図書館御当局に感謝申しあげます。